いつきの“ヒューマン・ビーイング”
人権について考える ①

土肥いつき
京都の公立高校教員。24 時間一人パレード状態のトランス女性。趣味の交流会運営で右往左往する日々を送っている。

人権教育との出会い

『現代性教育研究ジャーナル』の読者のみなさん、土肥いつきです。この４月から、またまた連載を担当させていただきます。が、わたしをご存知ではない方のために、あらためて自己紹介をします。わたしは京都の府立高校で教員をしています。教科は数学ですが、あまり数学教員というアイデンティティはありません。というのは、わたしが担当するのは、どちらかというと数学が苦手な生徒であることが多く、「数学やってる感」がわきにくいからです。でも、だからといって、いまの仕事がイヤなわけではありません。

ある年担当した生徒があまりにも数学が苦手なので、「いつからわからなくなったの？」と聞いてみました。すると「中学１年生でわからなくなって、あとはまったく勉強しなかった」という答えでした。ということは、この生徒は１次方程式の計算がギリギリということになります。このような生徒が３次方程式や微分積分の問題を解けるようにするのがわたしの仕事です。だから、目標は毎年「赤点者ゼロ」です。

赤点者ゼロの目標を達成するためにはどうするか。わたしは、数学が苦手な生徒から学ぶ以外、方法はないと思っています。なぜなら、何がわからないかを知っているのは、その生徒しかいないからです。ただし、その生徒は、何がわからないかをどう伝えたらいいかがわからない。それを聞き出すのがわたしの仕事だと思っています。そして、そのような授業は、その生徒の影に隠れたたくさんの数学の苦手な生徒にとってもわかりやすい授業になると思っています。

おそらく、わたしと同じようなことを考えている教員は、全国にたくさんおられると思います。では、なぜそんな「あたりまえ」のことをわざわざ書いたのか。それは、わたしの場合、このような考え方になったのは人権教育との出会いがあったからです。

人権教育と出会う前のわたしは、数学が苦手な生徒に対して「なんでこんなこともわからへんねん」と思っていました。したがって、赤点を取っても、それはその生徒の自己責任と考えていました。勉強ができる生徒がいい生徒、ヤンチャな生徒は苦手、そんなふうに考える教員でした。しかしながら、先輩教員に連れられて被差別部落の隣保館に行き、高校生の学習会でムダ話の合間に数学を教えるようになったことで、わたしは少しずつ変わっていきました。生徒たちが学校で見せている顔は、その生徒のほんの一面でしかないこと、そしてさまざまな生活背景を背負って学校に来ていることが、すこしずつわかってきました。それは勉強だけでなく、例えば「ヤンチャな行動」もまた同じことです。そんなことがわかるにつれて、教員という仕事で大切なことは、勉強が苦手な生徒に教えることであり、ヤンチャな行動をする生徒と向き合うことであり、それらを通してその生徒の進路を保障することであるということがわかってきました。

担任時代は、ひたすら生徒たちと話し込み、家庭訪問し、地域・中学と連携しながらヤンチャな生徒たちの進級保障・進路保障にとりくみました。その後、人権教育担当者として勤務校の人権教育のコーディネートをしたり、京都府立高校の人権教育研究会の事務局に入って、京都府立高校の人権教育推進のためにとりくんできました。こんなふうにして教員生活を過ごしてきて、今年で 37 年目になります。結局、その約３分の２にあたる 25 年を、わたしは人権教育の担当者として過ごしました。さらに担任時代も学年団の人権教育の担当をしていたので、それも含めると 33 年間、人権教育に担当者として携わってきました。

そんなわたしも現役でいられる時間はそんなに長くはなくなりました。しかしいざ、自分が先輩から受け継いだ「バトン」を後輩教員のみなさんに渡しただろうかと思った時、なにもできていないことに気づきました。それはわたしだけでなく、全国で人権教育にとりくむ仲間たちの共通の思いです。そんな折り、JASE から今回の連載の依頼が来ました。そこで、「わたしらしさ」を活かした「人権教育概論」のようなことをしてみようかなと思いました。次回は、少し自分の話を書いてみようと思います。